

# 「やりたいことができ、僕は、幸せ」

複合経営

新規就農

働く環境



## ○Ambitious Farm(株) (江別市)

代表取締役 柏村 章夫 氏

色鮮やかな野菜を栽培し、ふたりのマルシェで販売する。

自社の未来ビジョンを掲げ、次の世代につながる農業を目指す。

## ○農園の概要

経営面積：36ha

主な作物：水稲、ブロッコリー、長ネギ、大根、リーフレタス、キャベツ、トマト他

## 目次

- ▼ 人生のあゆみ
- ▼ 今やりたいことをやるという決意
- ▼ つくり手のやりがい
- ▼ 女性が働きやすい環境を
- ▼ 柏村さんが大切にしていること
- ▼ 全員が目指す未来の Ambitious Farm

## 人生のあゆみ

「農業をやりたい」という想いを叶えるため、商社マンをやめて就農を決意

北海道に移住。いとうファームで研修スタート。

2014年  
就農と同時に法人設立。「様々な食材を作りたい」と考え、多品目（約100種）栽培を始める

～現在～  
企業と食材のコラボや社員派遣を行う等、多方面の業種と交流を持ち、販路拡大に努めている

## 今やりたいことをやるという決意

Ambitious Farm(株)の代表を務める柏村章夫さんは、非農家出身ではあるが、若い頃から農業に興味があったという。(もともとは酪農が夢であったとのこと)

その夢の実現に近づくため、道内の農業系大学へ進学。大学卒業後は、広島県の穀物商社に就職したものの、農業をやりたいという気持ちは、日々強まるばかり。その想いを実現するため、江別市の実家で農業に従事している同級生で親友の伊藤さんに連絡し、就農の決意を伝えた。その後、江別市で約2年間の農業研修を終え、就農。就農に当たっては、伊藤さんと共に法人を設立し、伊藤さんの父から農地を借りて経営を行っている。

## つくり手のやりがい

Ambitious Farm(株)は、水稻の他、じゃがいもや多品目の野菜を栽培し、自分たちで運営するたべる人とつくる人をつなぐ「ふたりのマルシェ」や定期購入の「当日便」により消費者にお届けしている。

会社の設立当時は、契約栽培を中心に行っていたが、お客様からの要望に応えたいという思いから、その時々のお客様ニーズに応えた作物を常に考え、SNSでの発信力を意識した野菜の品揃えを重視してきた。

農場では、ブロッコリーやカラフルポテト等が主力となっているが、多品目を栽培するには、作業する従業員との情報共有を常にしておくことや、農場全体の作業について、従業員同士の情報共有も大切にしている。

日々の農作業は複数人のチームによって行われるが、その日の作業内容は、チームで組み立てていく。翌日には、その作業を違うチームが引継ぐ場合もあるため、農場全体の作業の進め方が一目で分かるよう、アプリ等を活用することによって、スムーズに進むようにしている。このような工夫が、旬の野菜を複数組み入れて、お客様に届けることができることにつながる。

## 女性が働きやすい環境を

Ambitious Farm(株)は、女性の力で成り立っていると言っても過言ではないと柏村さんは語る。

農業では、お客さまの気持ちを理解する力、売り方の工夫、SNSでの情報発信の仕方等、女性の力がとても生きる場面が多くあると感じている。

また、一昨年の出来事であるが、台風が直撃し、ビニールハウスや納屋に大きな被害を受けた時、柏村さんは、はじめての経験でもあり、精神的なダメージからなかなか対応策を打ち出せずにはいた。その時に、女性従業員がきびきびと根気強く、丁寧に復旧していく姿を見て、女性の柔軟に対応する強い力を実感した。

Ambitious Farm(株)では、女性が働きやすい環境作りとして、子どもと一緒に出勤できるし、シフトは従業員に組んでもらっているという。

女性従業員の中には、ママさんが多いので、保育園から電話がきたら30分以内に退社できること、風邪を引いたら無理せず休むことを約束事としており、そのことで、従業員が少ない日があっても、それは仕方ないというのが会社の方針。そういったことが働きやすい、さらには働き続けられる職場につながっている。

## 柏村さんが大切にしていること

やりたいことを楽しくやる。想いがあって農業を始めたいのなら、それを信じるべき。「今を生きる」という気持ちで、毎日を過ごすことで、僕は農業をやれて幸せだと感じている。

農業を行う上では、常にアンテナを張っておくことが大事。いい経営をするためには、情報を掴んでいないとできない。夏場は、自社のマルシェで、対面販売することで「食べる人」と「つくる人」で話す機会を設ける。冬場には、業種を問わず、いろいろな人と交流を持つように心がけている。そうしたことで、農作物の生産だけではなく、商品開発のコラボ、企業への派遣等を行い、常に刺激を受け社員が前向きに考えられるようにしている。



## 全員が目指す未来の Ambitious Farm

Ambitious Farm (株)の事務所には、一枚のデザイン画が壁に飾られている。

2017年に経営者が集まる経営研究会（中小企業家同友会経営指針研究会）に参加した時に、自社の将来ビジョン（10年ビジョン）を考える機会があった。

一緒に働く仲間も夢を抱いて農業ができるような目標がビジュアルにあることも必要だと考えた。

その後、社員とパートさんに自分がやりたいことや将来どんな農園で働いていきたいか夢や希望を面談で聞いた。そして、2018年に友人に想いを伝えて一つの絵にしてもらい、Ambitious Farm(株)未来ビジョン※が出来た。

未来ビジョンの中には、農業生産を行うエリア、農業体験できるエリア、新設した自社社屋、ふたりのマルシェ農場店、農場レストラン、自社ビール樽、宿泊施設、農業を学べる図書館、足湯、星空が見えるガラスのイグルー等が描かれている。

この未来ビジョンには、Ambitious Farm(株)で働く人達の夢や理想がたくさん詰まっており、働く人達にとっていい農場であることが描かれている。10年後という枠で作成したが、実現には焦らず、人の成長と一緒に事業展開を考え、今の時代に完成できなくても、次の世代の人達がやってくれると思うし、また、将来、その時のメンバーでビジョンを描き直してもいい。

日々の農作業は地道で、土づくりに始まり、草取りなどが中心となる。そんな中で働く人の想いが目に見える形であることがモチベーションの維持につながっている。



※Ambitious Farm(株) 未来ビジョン



# 「人と人とのつながりが大切」

複合経営

農家後継

新規就農



## ○ (株) グラフィックファーム (栗山町)

代表取締役 須郷 章生 氏  
谷内 智隆 氏

「地域の農地を受け継ぎ、次の世代につなげたい」という農家三代目と新規就農者が手をつなぎ法人を設立。

## ○農園の概要

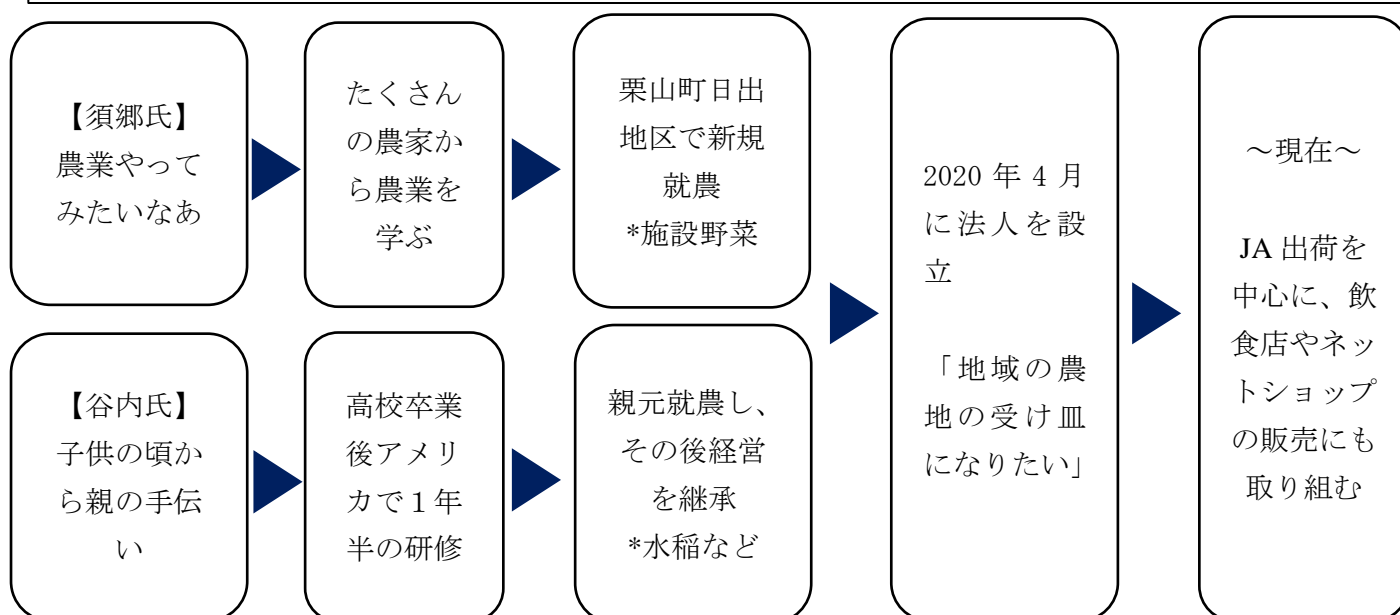
経営面積：約 40ha

主な作物：水稲、小麦、業務用トマト、アスパラ など

## 目次

- ▼ 人生のあゆみ
- ▼ この地域の農業を将来に
- ▼ 土台のない経営はダメ
- ▼ 人と人とのつながりを大切に

## 人生のあゆみ



## この地域の農業を将来に

栗山町日出地区にある(株)グラフィックファームには代表が二人いる。須郷さんと、谷内さんだ。

### 【須郷さん】

札幌市で営業マンをしていたが、外回りが多く、外回り先の農家を見て、漠然と「農業っておもしろそうだな」と思い、その頃は酪農をイメージして、広い牧草地をバギーで走りたいと想像を膨らませていた。その後、市民農園で野菜の栽培に取り組んだり、豊富町で2泊3日の農業体験に参加したりと、実際に触れることで農業をやりたいという気持ちがだんだんと強くなり、就農を決意。北海道農業公社に相談をしたところ受入れのタイミングが合った栗山町日出地区で農業研修をスタートすることになった。全く農業をやったことがなかった須郷さんは、先が見えない不安を抱えながらも、「家族のために後戻りはできない」と、強い覚悟を持ちながら2年間研修を行い、地域の方々から様々な技術を教えてもらったことで、ハウス栽培のミニトマトを主力にした経営を開始した。



### 【谷内さん】

もう一人の代表である谷内さんは、日出地区の農家で生まれ、子供の頃から両親の農作業を手伝っていた。農業が当たり前の環境で育ったため、親から継いで農業をやるんだろうと考えていた。高校卒業後、アメリカでの1年半の研修では、広大な大地を手作業で行う露地野菜と酪農を経験し、精神力が鍛えられたという。帰国後、親元就農し、その8年後に親から経営を引き継いだ。

### 【(株)グラフィックファームの設立】

新規参入者の須郷さんと、農家出身の谷内さん。異なった人生を歩んできた二人が代表となり設立された(株)グラフィックファームであるが、その設立に至った背景には、日出地区の後継者不足が関係していた。中山間地域にある日出地区では、13戸の農家が約100haの農地で営農しており、新規参入で若返りが進んでいるものの、後継者がいない高齢農家もいる。須郷さんは、研修の時からそのような状況を目の当たりにし、自分の経営が安定してきたら「この地域の農業を受け継ぐ、受け皿法人を作りたい」と考えるようになっていた。そのことを、当時一番歳が近く、普段から付き合いのあった谷内さんに相談。谷内さんもその思いは同じだったこともあって、施設園芸と水稻・畑作と、経営形態も規模も違う経営を一つに統合し2020年4月に(株)グラフィックファーム誕生した。

須郷さんは経営管理などの会社の運営全般と施設園芸、谷内さんは農場長という立場で水稻・畑作部門の経営を分担し、それぞれの責任の下進めているという。この考え方は、「元々の経営スタイルが違っていてもあり、組織内で分担しながら進めよう」と、サラリーマンだった須郷さんが提案したものだった。

「地区の平均年齢は60代後半。体が動く限り続けたいと言う人もいるが、近年は気候変動が厳しく、規模を縮小したいという人もいる。後継者がいないために農業をやめる人もいる。そのような時は、私たちに声をかけてもらえれば、法人が農地を引き受けて地域の農業を維持していきたい」とお二人は意欲を見せる。

## 土台のない経営はダメ

法人設立後の経営面積は約 40ha。主な作物として、業務用トマト、アスパラ、水稻、小麦、スイートコーンを栽培している。これから周りの農地を引き受けるとなった場合、20~30a 程度の小さい農地や水はけが悪い農地が含まれると予想される中で、アライグマ対策や機械の導入費などを考えると、多品目よりも、作物を集約したシンプルな営農を目指していきたいと考える。

出荷先のメインは農協に据えながら、提携先の飲食店やネットショップでの販売にも取り組んでおり、ネットショップでの取扱は年々増えている。主力の一つである業務用トマトは、全量を農協に出荷。スライストマトに加工され、コンビニなどのサンドイッチに使われたり、レストランでも使用されている。

「収入の土台となる部分は安定させて、経営の基盤を作ることが大事。そこから自分で販売したりなどプラスαの部分をやってあげればいい。それは新規就農した頃から大事だと思っている」と、須郷さんは語る。



## 人と人とのつながりを大切に

お二人それぞれから、若い農業者やこれから就農を目指す方に向けてメッセージをいただいた。

### 【須郷さん】

農村は基本アポなし（笑）。こちらの仕事の都合も関係なくふらっと立ち寄りたりして、付き合いが始まる。直接顔を見て話してみたいところが農村の文化なんだろうな。だから、人と人とのつながりが大切だと思う。栽培だけを覚えればいいということではない。自分には親方と呼べる人がいなく、つながりができた多くの人に教えてもらって、形になっていった。一方で、農業をする上では、利益率の確保や年間を通した働き方の改善など、会社としての責任も考える必要がある。

農業はシンプル。消費者の皆さんに作ったものを買って、食べてもらって、喜んでもらうことが何より楽しい。サラリーマンの時では得られなかったものが農業にはある。食べ物は生きてく上で大事なもの。だから農業は、非常に大切な産業であり、守っていくために少しでも力になればいいと思っている。

### 【谷内さん】

自分みたいな後継者は子どもの頃から親の営農を見てきた。夏は畑に行ったままずっと帰ってこない親、農業以外の人から見ると普通ではないことが当たり前だった。逆の立場で考えると、戸惑うことも多くあるのではないかなと思うが、生活の糧をここで稼ぐとか家族を養おうと思ったらサラリーマンでも農家でも同じじゃないかな。農村は、仕事と生活両方で関わる場だから、人付き合いは四六時中あると思って大切に考えなければならぬところ。

職業として農業を選んでも、イヤイヤやっていると続かない。農業を好きになれば長くやっていけると思う。



※ 株式会社グラフィックファームの HP の詳細は、右記参照

URL: <https://graphicfarm.jp/>



## 「どんな形でも就農できる地域にしたい」

酪農

女性農業者



### ○(株)マドリン (広尾町)

代表取締役 角倉 円佳 氏

2007年に法人を設立。飼料生産や育成牛管理を外部委託することで、搾乳に特化し、1人で牧場を運営している。

### ○牧場の概要

経営面積：40ha（採草地）

飼養頭数：経産牛・育成牛含めて110頭程

### 目次

#### ▼ 人生のあゆみ

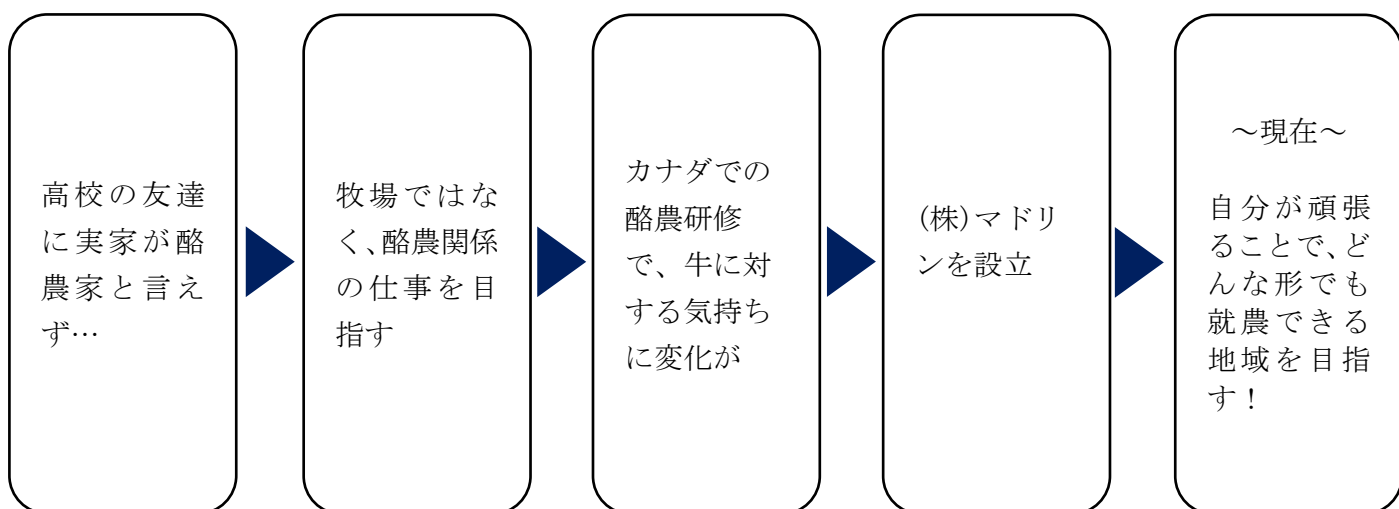
#### ▼ 牛の一生に関わっていけるのが楽しい

#### ▼ 牛のために私がしてあげられることを

#### ▼ 意地が続けられた理由

#### ▼ 広尾町で就農する人を増やしたい

### 人生のあゆみ



## 牛の一生に関わっていけるのが楽しい

実家は酪農家で、小さい頃から家の手伝いをしていた。酪農は大変な仕事で、ネガティブなイメージがあると感じていて、高校では友達にも実家が酪農家だと言えなかった。高校卒業後は、帯広畜産大学の別科に進学。その時は、牧場をやりたいというよりは、酪農関係の仕事に進もうかなと思っていた。

大学卒業後に、カナダへ酪農研修に行く機会があり、その時の研修先が、女性が経営する牧場だった。当時は研修先を探すにも、日本人の女の子はなかなか選んでもらえない。日本人は真面目だから一生懸命に仕事をするといういいイメージはある一方で、女の子はちょっと…ということで断られていたが、最後にやっと「うちでもいいの?」と言ってくれた方が先ほどの牧場。

自身がカナダで感じてきたということもあるが、酪農の魅力は、産まれた仔牛を親になるまで見届けられること。いろんな過程に関わっていけること、自分でファミリーを増やしていけることが楽しい。カナダでお世話になった女性経営者が、牛が大好きで、我が子のように接している姿を見たことが、大きな影響となって、自然と牛が好きになっていった。牛をこんなに好きって思うようになったのは、カナダに行ってから。言葉もあまり話せなかったが、カナダへ行っていなければ、今牧場をやっていないと思う。



## 牛のために私がしてあげられることを

日頃から気をつけていることは、牛を健康に飼うこと。健康だと何より作業がスムーズに進むし、経費も抑えられる。そのため、牛の変化に早く気づくことを意識している。

酪農コンサルタントの方に相談した時、投資をするときの優先順位というものがあり、第一に事故を減らすこと、次は牛の快適性、最後に労働力の軽減と言われた。当時給餌ロボットの導入を計画していたが、考えを変え、牛を健康な状態で分娩させることを優先することにした。母牛が健康に仔牛を産めば、病気にならず、獣医さんのお世話にならないし、作業全体がスムーズに進む。たとえ餌やり時間に時間がかかったとしても、結局最後に終わる時間は同じため、牛のために、今一番した方が良いことを考えるようになった。今後は、分娩の環境を良くするために乾乳牛舎の建設を考え中。

うちの牧場から死んだ牛を外に出したくない。市場や肉に行くことになっても、生きて歩いて出て行ってほしい。そのために、何かおかしいと思った時はすぐ処置してあげる。そうすれば、あまり長引くこともない。会社を始めた時からそうだが、教科書を読むよりも、周りの人から教えてもらったことが多く、そうやって自分で牛を見られるようになってきた。



## 意地が続けられた理由

カナダから帰ってきて、実家の牧場で一年ほど働いた頃、父親からの提案もあって、独立してマドリンという牧場を設立した。父親も新規就農で牧場を始めたということもあり、私にも「自分で牧場を持つ楽しさ



を知ってほしい」という思いからだったようだ。

独立時は女性ということもあって、経営者としてまったく良く見られていなかった。女性という珍しさで見られたり、本当にできるのかという目で見られたが、近所の酪農家の奥さんが、様子を見に来てくれたり、買い物ついでに寄ってくれたり、励ましてくれたことが支えとなって続けてこられた。それから1年、2年と続くと周りが変わってきた。牛が逃げていたら教えてくれたり、牛の移動に時間がかかっていたら手伝ってくれたり、助けてくれた。一人で続けてきたということと、その頃から始めていた女子会の開催などを雑誌等で取り上げてもらうと本当に周りの見方が変わり、認められていった。周りに認められる前は、自分自身も悔しかったし、自分がやめたら、「やっぱりな」という風に思われるから、意地でしかなかった。

興味があって、憧れて始めた仕事でも、環境に恵まれなかったら、やめてしまう人もいるけれど、同志がいたり、話せる場があると、もう少しがんばろうと思える。孤独だなと思った時に仲間にも助けてもらったので、今は自分が中心となって、仲間づくりのために女子会を開催している。



## 広尾町で就農する人を増やしたい

この地域を「農業を、酪農を始めるなら広尾町」でと言われるようにしたい。

北海道に憧れ、将来牧場を持ちたいと夢を持つ女の子が来て、色々な方に「牧場をやりたい」と話しても、「女一人では無理だ」と言われ、結局スタートラインに立てずに困っている学生がいる。それを決めつけているのが、今の生産者ではないだろうか。これだけ農家が減っているのに、なぜ農業をやりたいと言っている人を受け入れようとしないのだろうか。自分を一つの事例として、経営状態をキープし、これからもっと良くしていければ、第2、第3のマドリンみたいな形が現れるのではないか。だからこそ、受け入れる地域の認識を変えたいと思っている。

夫婦で始めることも素晴らしいことだが、別に夫婦でなくても就農する形があってもいい。異業種であれば、友達同士の共同経営で起業する方が多くいるのに、どうして酪農はダメなのか。そういう形で認められないというのは違う。もちろん勉強、経験することは大事だが、女性だからダメとか、この人たちだからダメっていうのは違うと思う。やる気や意欲がある若者の気持ちをつぶさないように、地域として受け入れていくというのが大事だと思う。だから、広尾町だったら、どんな形でも就農できるという地域にしたい。

自分がやりたいという気持ちは大切にしてほしい。研修や仕事を始めても、続けてみないと何も見えてこない。分からないことは絶対にあると思うから続けてほしい。そういう意味で、これから就農を考えている方へは、「ぶれない気持ちとパッションが大事!!」と伝えている。「誰ができないというのはないから、やりたい方はぜひ一緒にがんばりましょう」。



※ (株)マドリンのHPの詳細は、右記参照

URL:<https://mowmow-madelyn.com/>

# 「『牛』も『人』も幸せであるような牧場にしたい」

酪農

新規就農



## ○菊地ファーム（広尾町）

菊地 亮太 氏、亜希 氏

牛がのびのびと自由に行動できる牧場であることを大切にし、乳製品加工やカフェを通じて消費者との積極的な交流を行っている。

## ○牧場の概要

経営面積：44ha（採草放牧地）

飼養頭数：経産牛・育成牛含めて100頭程  
牧場内で、乳製品加工とカフェを運営

## 目次

### ▼ 人生のあゆみ

### ▼ ここまできたのは牛のおかげ

### ▼ 牧場に来てもらうきっかけの1つ

### ▼ 知らないのは消費者のせいではない

### ▼ いろいろなやり方があっていい

## 人生のあゆみ

帯広の大学で二人は出会う。亮太さんの牧場をやりたいという思いに就農を目指す

2008年結婚し、翌年に新規就農

「牛や酪農をもっと身近に感じてもらうきっかけとなる場所に」という思いから牧場内にカフェをオープン

～現在～  
酪農体験・自家産の乳製品等を通じて、酪農の魅力を伝えている

## ここまできたのは牛のおかげ

菊地亮太さんは、もともとは動物好きで、将来は牧場を持ちたいという夢を持ち、帯広の大学に進学。最初は競走馬の生産牧場を目指していたが、大学で酪農や牛の魅力を感じつつ、研修で行った牧場が輸入穀物をほとんど与えずに放牧をしており、酪農にはいろいろなやり方があると衝撃を受け、酪農で就農する決意をした。

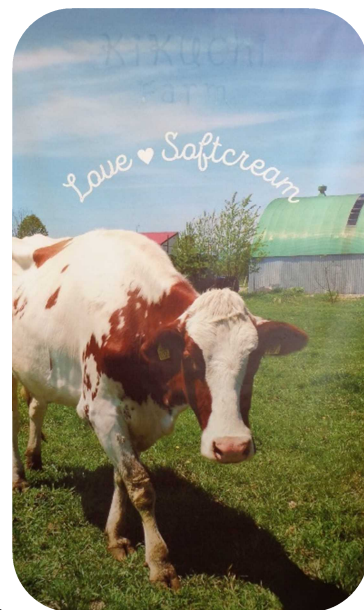
また、大学時代に出会った亜希さんは、亮太さんの牧場をやりたいという夢に、牧場で搾った生乳を加工するという形だったら、自分も一緒に就農を目指すことができると思い、同じ道を歩むことにした。

就農に向けた研修の中で、「自分は牛をこう飼いたい」という理想がずっとあり、だからこそ自分でやってみたいという意識が強くなった。

ただ、いざ就農してみると思い通りにならないことが沢山あり、あらためて自分の未熟さを思い知らされた。様々な経験をしながら少しずつでも酪農家として成長できていると思っていたが、就農10年目を迎えた年に多くの牛が乳房炎を患い、結果として頭数を減らしてしまうという出来事があり、まだまだ日々勉強だなと痛感させられた。

酪農家として就農する際に、自分自身への評価は100点満点中80点、90点くらい取れているだろうと思っていたが、今振り返ると20点ぐらいしかなかったと思う。それぐらい未熟だった。理想はあったけど、それを実現するだけの知識もスキルもないということが、身にしみた。だから牛をしっかりと見て、牛に教えてもらいながら、ここまで来た。

今後に向けては、牛を動物として愛情をもって飼うことと、経営をしていくことのバランスを経営者としてどう判断するかについて、整理していきたいと考えている。



## 牧場に来てもらうきっかけの1つ

菊地ファームでは、「牛乳＝牛というのは誰でも分かることだが、牛はいつから牛乳を出すのかを知っている人は少ない」。それを知っていることが当たり前にしたという思いから、地元小学生の酪農体験、都市部の修学旅行生の農村民泊の受け入れを行っている。

また、2018年には就農前から思い描いていた乳製品加工施設・カフェを牧場内に建て、カフェ内では自家製乳製品や搾乳の役割を終えた牛の肉料理を提供している。カフェというスペースを設けた理由は、一般の方に食べる場所まで一貫して提供することで、牧場や牛のこと、食のことについて、もっと伝えられることがあると思ったから。牧場は一般の人が、なかなか入れるようなところではないけれど、カフェみたいなスペースが牧場にあれば、来やすくなるのかな。牛を見て素直に感じることに、その牛を見ながら、牛肉を食べるという経験ってそんなになんか思うが、うちでは、料理に使っているお肉の牛の名前もお伝えすることで、「命の大切さや食を考えてもらうきっかけになれば」と思っている。



## 知らないのは消費者のせいではない

広尾町は、酪農も漁業も林業もあり、十勝管内の中でも、一次産業のバリエーションが多い町。その魅力を伝えるために、自分は酪農をテーマに体験できる場を用意し、酪農家の思いを伝えることができれば、来てくれた方に何か得るものがあるのではないかと。そういう機会を増やしていきたいと思っていたと亮太さん。

そして亜希さんも、就農5年目に自分ができると、広尾町に恩返ししたいと考えはじめた時に、洞爺湖町でやっているフェスを知り、こういうことをやれば、人に来てもらえるんだと感じていた。ちょうど同じタイミングで、広尾町内の同世代の異業種20人くらいとつながる機会があり、それをきっかけに何か一緒にできないかと立ち上げたのが「ピロロフェス」。

ピロロフェスは、一次産業、食、音楽、雑貨販売を融合させた体験型イベント。始めて良かったことは、一緒にやろうと言ってくれた人たちとの絆が強くなったこと。広尾町を思う気持ちが、以前より強くなった気がしている。今後については構想段階だが、毎年会場を変えるのではなく、会場はメイン1カ所に決めて、1日の中で酪農体験する人たちはこっち、林業体験する人たちはこっちに行こうかみたいな体験できる場所がそれぞれ周りにあり、町全体でイベントができればいいなと思っている。



また、菊地ファームでは、2021年10月に初めて、地元の学校給食に牛乳を提供。農協から「菊地さんのところの牛乳を出したらどう」と話を持ちかけられたのがきっかけで、なかなかできないことの機会をくれた農協には感謝している。子供たちもすごくおいしかった、毎日これを飲みたいと言ってくれているみたいで給食センターの方からも今後も続けたいとのうれしいお声を頂いたので、3ヵ月に1回のペースで提供していく予定でいる。

## いろいろなやり方があっていい

### 【亮太さん】

酪農にはいろいろな牧場があって、いろいろなやり方があるけど、どれも正解。多様性が酪農の良いところだと思っている。ぜひ、自分の目指す酪農とか、理想とかを見つけてもらって、それを実現して欲しい。

答えが1つではないというところが良いところだと思うので、誰かに言われたからではなく自分の色を出す、自分がやりたいと思う牧場を作って欲しい。

新規就農を希望している人は厚かましいぐらいでちょうど良いと思う。うちに来る就農希望者の方にも、その方が「先にチャンスがくるよ」と話をしている。だから、実習中に取り組んでみたいことがあれば、やりたいことを声に出した方が良い。もしそれに対して、厚かましいと思う人がいるかも知れないけど、絶対そっちの方が早くチャンスが来る。就農は、タイミングと出会いなので、それをいかにつかめるかが大事。

### 【亜希さん】

自分が何をしたいのかを十分に考えてほしい。就農することはゴールではないので、就農して自分が何をしていきたいのか、どういう生活をしていきたいのかを具体的にイメージしながら、いろいろなことにチャレンジしている先輩たちの話を聞いて、最終的に自分の目指すところに進んでもらえたらいいな！と思います。



※ 菊地ファームのHPの詳細は、上記参照

URL: <https://kikuchifarm.jp/>

# 「農業の可能性が 地域を変える力に」

果 樹

新規就農



## ○相馬 慎悟 氏 (余市町)

飲食店勤務から果樹農家へ。醸造用ワインを主に栽培。地元食材を使用したレストラン、ジェラート店を余市町内で経営。

## ○農園の概要

経営面積：約 6.2ha

主な作物：醸造用ぶどう、生食用ぶどう、ブルーベリー、ラズベリー

## 目次

### ▼ 人生のあゆみ

### ▼ 「自分のワイン」を作りたい

### ▼ ウチの労働報酬は 完全歩合制

### ▼ 余市町の未来のためのブランディング

### ▼ 小さな幸せを見つけるのが上手くなる

## 人生のあゆみ

飲食店で勤務。  
自分のワインを  
作りたい

ワイン用ブドウ  
を作るため、  
就農を決意。  
最初は、農業法  
人に就職

余市町で独立  
し、ソウマファ  
ームを設立

～現在～  
余市町の未来を  
切り開くために、  
町全体のブラン  
ディングに挑  
戦！！

## 「自分のワイン」を作りたい

相馬さんは、北海道胆振地方の伊達市出身。仕事で札幌に移住し、イタリアンレストランやワインバーで勤務していた。飲食業で働いていた頃は、店舗のマネジメント業務やワインの仕入などを担当しており、就農前からずっとワインに関わってきた。そんな日々を過ごす中で、「自分のワイン」を作りたいと思う気持ちが少しずつ膨らんでいったと言う。

「自分のワイン作り」に興味を持ち始めた相馬さんは、レストランで働いていた頃から、仕事が休みの日には、余市町へ行き、農家の畑を手伝わせてもらっていた。ソムリエ試験の勉強をしていればワインのことは大体わかるが、畑に入ることによって得られる知識もたくさんあった。そんな経験から「やっぱりワインっていいなあ〜」とあらためて感じた。

一方、札幌の飲食店で勤務していたころ、父親が他界。将来的に母親と一緒に住むことを考えると、飲食業は、夜中働いて朝方帰ってくることも多く、勤務体系が不規則なため、そのような生活に合わせてしまうと、母親が体を壊してしまうのではないかと憂慮していた。

自分の夢と家族の将来のことを考え、農家出身の母親に「余市町でワインブドウを作りたいんだ」と話し、いよいよ相馬さんの“ワイン作り”への道がスタートした。

相馬さんは「自分でワインを作るなら余市町しかない」と考えていた。ワインの歴史が深く、ウイスキーもあり、世界レベルの農家がたくさんいる。海や山も近くにある。こんなに良い条件が揃っているところは、世界中を探しても他にないと考えたからだ。

当初、余市町で新規就農する予定だったが、余市町の農業法人に、「僕らもワインを作るつもりなので、相馬さんのような熱量を持っている人に入ってもらいたい」と声を掛けられたことから、新規就農の話を経て、2014年に農業法人に雇用で入った。

その後、相馬さんが独立し、ソウマファームを設立したのが2019年のこと。

## ウチの労働報酬は 完全歩合制

農業に関わり合いをもってくれる人を増やしたいという考えから、ソウマファームの労働報酬は、完全歩合制。働きに来る人は、もともと農業に関わりがない人が多く、働く人のほとんどが女性。男性と比べると、体力的には厳しい面もあるが、そこは、人数を増やすことでカバーできている。

完全歩合制の給料に上限はなく、来た人が頑張り過ぎてしまって、相馬さんから「そろそろ今日終わりにしませんか？（笑）」ってお願いすることもあるそうだ。

自分の好きな時に来て、自分の好きな時に帰っていい。収穫物を計量してお給料を貰うだけ。だから「今日はもう暑いからやっつけられない！帰ります！」それでも大丈夫。自分のペースで働いてもらいながら、農業に関わり合いをもってくれる人を増やすことで、“農業を楽しむ”“人口は少なからず増えるかな”と思っている。このようなやり方の農家が増えていけば、週末に農業をやりたいと考えている方たちのニーズに応えられるのではないだろうか」と相馬さんは話す。



## 余市町の未来のためのブランディング

相馬さんは農業に加え、現在は、町おこしに全力で取り組んでいる。余市町を酒を飲みにくる町にしていることが、重要と感じていて、余市町に拠点を作りたいという人たちのバックアップもできたらいいと思っている。まず、売りになるものを作らないと、この町は死んでしまう。どうやったらこの町の未来を切り開かれるかと、いつも考えているそうだ。

今後、町おこしとして、面白いと思っているのが、観光会社と組む農作業体験ツアー。未経験者でも1～2時間でできるような作業を用意し、作業の内容を説明しながら、実際に体験してもらう。体験した方は少しでも関わった畑のものが買いたくなるだろうし、自分が関わった畑のワインが飲みたくなるような内容を考えている。

町内のワイン醸造家の方と「相馬さんが栽培しているソーヴィニヨンブランだからソウマニオンブランだ！」と、日頃から冗談で言っていたが、ふるさと納税の余市感謝祭企画で、「ソウマニオンブラン」という名前のワインを本当に作り、10分で完売。これも余市町の未来のための取組みの一つ。

これからの農業はエンターテイメントだと思っている。今は、物より思い出にお金を使う時代。例えば、サブスクリプションなどを導入することによって、農業って変わるのではないかなと思っている。

また、目標としているのは、シナジー（相乗効果）の最大化。余市町のブランディングに関わり、シナジーを起こしていくのが相馬さんの経営理念。



## 小さな幸せを見つけるのが上手くなる

「農業をはじめると、小さな幸せを見つけるのが上手くなりますよ」と相馬さんは言う。例えば、冬に畑の作業を残してしまった時。曇りですごく寒いなーと思いながら、枝を針金から切り離している最中に、雲の隙間から日が差し込んできて、身体がポカポカする。長時間、どんな天候であろうと外でやらなくてはならない仕事の中で、「つらいなあ」と思っていたところに、ちょっとした日が差し込むだけで「幸せだなあ〜」って思えるようになった。これが農業の良いところの一つだと思っている。

次に、少し厳しいお話。新規就農を希望する方たちの中には、都会の生活のスピードに疲れて、「農業だったらスローライフができるんじゃないか」という考えで来る人がいる。

「俺はこれがやりたいから農業をやるんだ！」っていう人はまれ。だから、途中でリタイアしてしまう人が多い。農業をやるのも「普通の仕事と同じぐらいの責任感をもってやらないとダメ」ということを伝えたい。自分は農業よりブラックな仕事はないと思っている。病気が発生してしまうため、時にはどんなに悪い天気でも遅くまで作業をしないといけない。数日、睡眠時間3時間も当たり前の世界。農業も普通の仕事と同じく、責任感が発生するもので、非常に厳しい世界。スローライフはない。でも、小さな幸せを感じることができるようになる。そして「農業には、色々な可能性があり、地域を変える力がある」ということが最大の魅力だ。

※ ソウマファームのHPの詳細は、右記参照

URL:<https://fruticoyoichi.com/soumafarm/index.html>

